

国家の再登場？

南東欧の国境封鎖に対するローカルの集合的抗議を事例として

中央大学 鈴木鉄忠

1 目的

アルベルト・メルッチによれば、現代社会における社会運動は、「ある社会においてなにが生起しつつあるかを示す指標」として、「国民社会そしてわれわれのグローバル・システムといったものの社会の変化のプロセスの核の部分を表しだしてくれる」ものであるという。もしそうだとすれば、可視化された運動を詳細に検討することにより、潜在的に進行する「社会の変化のプロセスの核の部分」を読み解くことが可能になるだろう。

この報告では、メルッチの運動論を糸口としながら、南東欧（イタリア・スロベニア・クロアチア）で巻き起こった国境封鎖に対するローカルの集合的抗議を事例として取り上げる。報告の目的は、第1に、国境封鎖をめぐるコンフリクトを表明した集合的抗議のネットワークを析出すること、第2に「抗議」に関与する個々人の意味づけと感情の動きを理解すること、第3に「抗議」が伝えるグローバルな性格を読み解くことである。

2 方法

データには、イタリア・トリエステにおけるフィールドワークで得た質的データとローカル・メディア（地方新聞紙、地方テレビ局、地方ラジオ局）が伝える情報を用いる。第1に、国境封鎖をめぐるコンフリクトについて、地方新聞紙の情報と参与観察のデータを解析することにより、国境封鎖の決定から現在までの経緯を再構成し、抗議表明者のつながりをネットワークとして析出する。第2に、参与観察のデータと関係者への聞き取り調査を通じて、抗議に関与する人々の意味づけと感情の動きの解釈を試みる。第3に、上記の2つの課題の分析を通じて、「抗議」に含まれるグローバルな社会変化のプロセスを読み解いていく。

3 結果と考察

分析の結果として、第1に「実態なき国境封鎖」があげられる。スロベニア政府の決定に対して、翌日には「ここには一人の難民も通過していない」という抗議がローカルからなされた。国境封鎖は、難民流入という実態のないまま、政府によって「つくられた非常事態」だったことが暴露される。ローカルの抗議は、短期間のうちに地方自治体と市民団体をノードとした連帯ネットワークとなり、イタリア・スロベニア・クロアチア3か国をまたいで展開した。その後、政府は「国境封鎖は予防措置」などと状況の定義を変更していく。ここに現代社会におけるコンフリクトが文化領域で展開する過程を読み取れる。第2に、前世紀の国境の移動で故郷喪失を体験した抗議者たちは、国境地域における平和と発展をヨーロッパ連合（EU）の理想に託してきたのだが、それが国境封鎖で損なわれたと感じている。「閉ざされる国境」という現実と「開かれる国境」への願望が矛盾を生み出し、それが抗議に関わる重要な意味づけになっている。第3に、予測困難な不確実性が増大するグローバル社会における「国家の再登場」である。ローカルの抗議は時間の経過とともに沈静化する一方、国境封鎖は2016年6月現在も継続している。難民問題に有効な手立てを打てないEUと、ローカルの抗議に持続性を与えられない地域に対して、国家は「つくられた非常事態」という状況の定義の下、さらに国家空間を強化させている。

文献

Melucci, A., 1996, *The Playing Self*, New York: Cambridge University Press. (=2008, 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ』ハーベスト社)